

第18図 第28・33・34次調査範囲図

墳丘墓群築造以前の堆積（概ね弥生時代後期以前のもの、以降、基盤層上の堆積）、丘陵を形作る堆積層（以降、基盤層）に分けられ、さらに層の性格によって6つに細分できる。墳丘墓群の遺構検出面は、遺物包含層1下面であり、墳丘墓群築造以前の遺構の検出面は、遺物包含層2の下面である。

全ての断面について、これらの基本層序を確認することができた。遺構は、終末期前半の墳丘墓群は、墳丘墓群築造以前の堆積層を基盤層まで掘削して築かれ、盛土は墳丘墓群築造以前の堆積層上に盛られている。弥生時代後期以前の遺構については、基本的には墳丘墓群築造以前の堆積層の下面からの掘込みとみられるが、後述する3407遺構で確認できたように、遺構埋土上面が土壌化（黒色化）する現象があり、表土下面での検出が困難を極めたため検出はできなかった。なお、今回の調査区内では、近代遺構であるマウンド状地形Eを除いて、古墳時代以降の明確な遺構は確認できなかった。

表土（墳丘墓群築造以後の堆積）（第19図1、第20図1）

にぶい黄褐色～暗褐色の極細砂層で、しまりが弱い。丘陵全体に堆積する。須恵器・土器（弥生土器）・石器が出土。

第1層（第19図2・3、第20図2・3）

褐色のシルト層で、しまりが弱い。後世に墳丘墓が削平を受けたことで生じた墳丘盛土を母材とする二次堆積土である。3号墓北側周溝及び北東部陸橋付近で顕著に認められる。

第2層（第20図4～8）

灰黄褐色～黒褐色のシルト～極細砂層で、しまりが弱い。丘陵全体に堆積する。墳丘墓群築造以後の堆積で、土壌化が進み黒色を呈す。須恵器・土器（弥生土器）・石器が出土。

第3層（第19図4・5、第20図9～13）

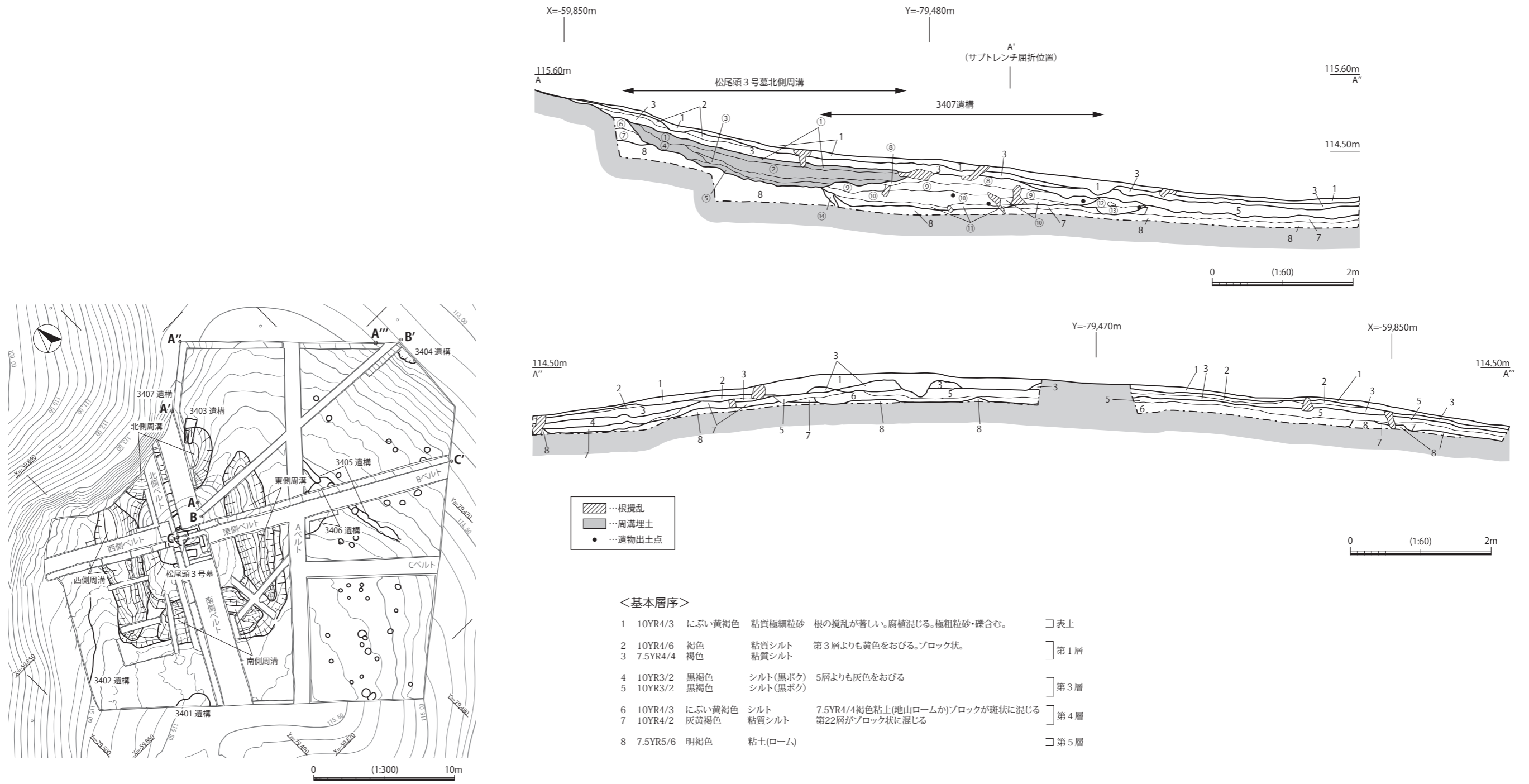
暗褐色～黒褐色のシルト層で、しまりがやや弱い。墳丘墓築造以前の土壌で丘陵全体に堆積が認められるが、丘陵東側の緩斜面部の一部は流失したのかみられない（Bライン・Cライン）。また、黒ボク化が進行した箇所も確認できる（第19図4・5、第20図11・12）。土器（弥生土器）が出土。

第4層（第19図6・7、第20図14～17）

にぶい黄褐色～黒褐色のシルト層で、しまりがやや強い。炭粒を含み、基盤層が風化・二次堆積した層とみられ、基盤層のブロックが混入するが、遺物は含まれない。

第5層（第19図8、第20図18～22）

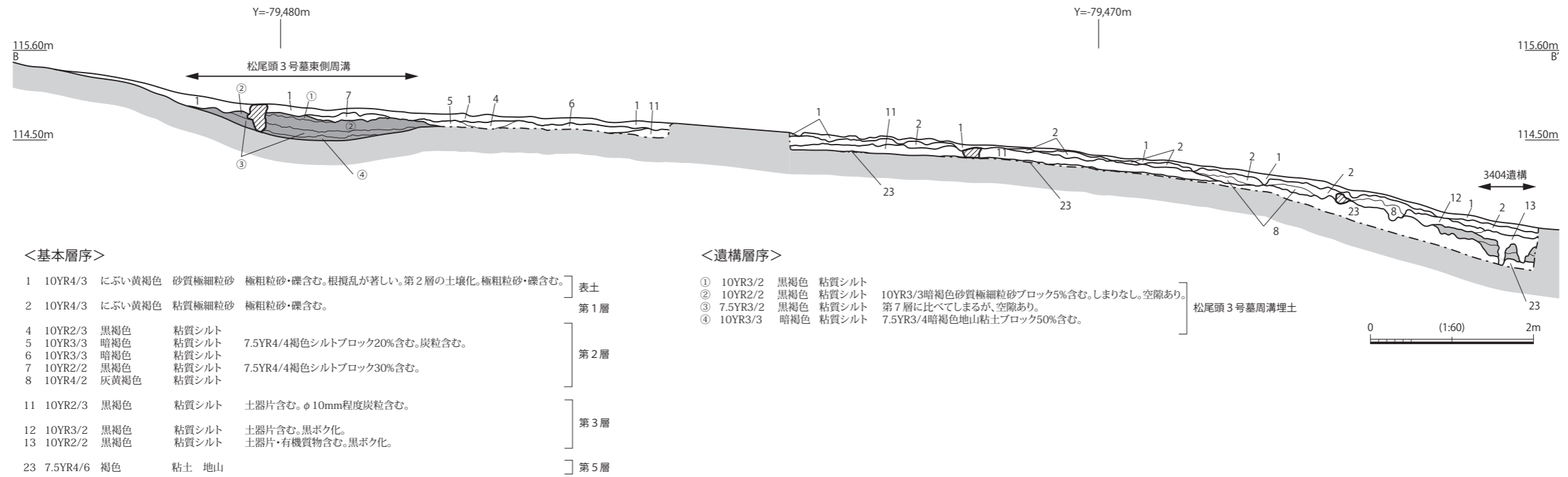
にぶい黄褐色～黒褐色のシルト層で、しまりが強い。基盤層で、丘陵全体に見られる。



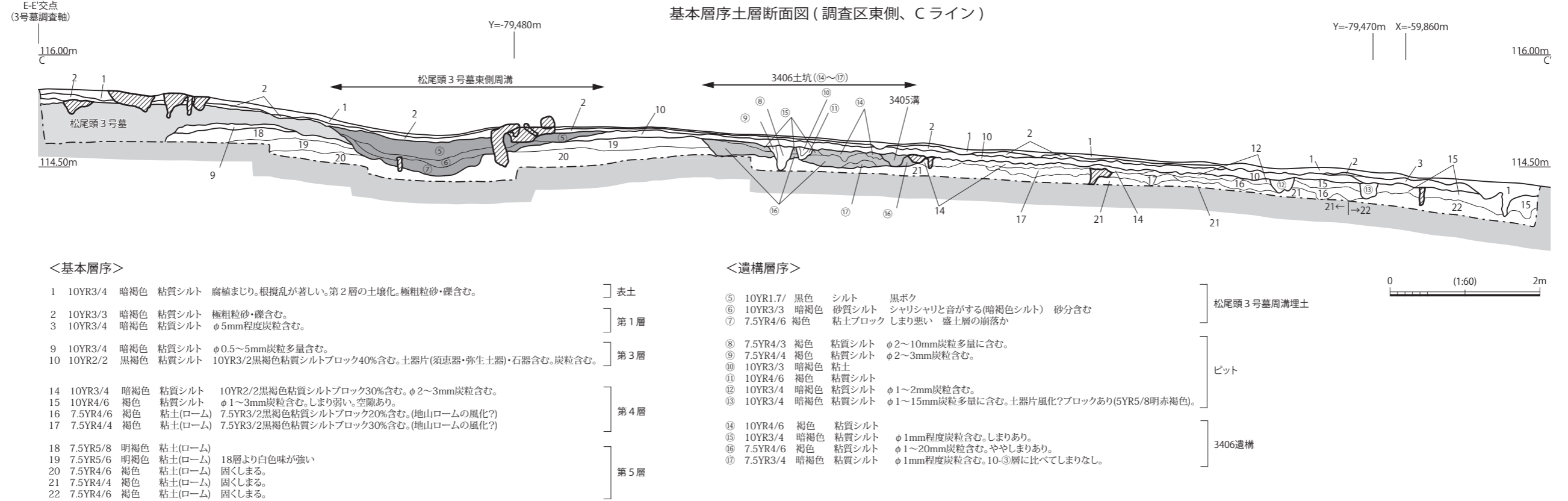
基本層序確認断面の位置

第19図 10区北東部基本層序断面図(1)

基本層序土層断面図 (調査区北東側斜面部、Bライン)



基本層序土層断面図 (調査区東側、Cライン)



第20図 10区北東部基本層序断面図(2)

第3節 松尾頭3号墓の調査

松尾頭3号墓（以降、3号墓）は妻木晩田遺跡において37番目に確認した墳丘墓で、方形周溝墓に分類される。墳丘の最頂部の標高はDラインとEラインの交点で115.54mを測る。松尾頭墳丘墓群の中では中央付近に立地し、松尾頭4号墓・5号墓（以降、4・5号墓）からは東に約20m離れた位置にあり、近接する墳墓等は確認していない。3号墓の形態は、周溝の四隅が途切れて墳丘内外がつながる構造となっており、周溝内からは葬送儀礼に使用されたとみられる土器が大量に出土した。埋葬施設は、墳丘内に少なくとも3基存在し、木棺2基及び土壙1基（築造契機となった中心埋葬（第1埋葬）は木棺）であることを確認した。史跡内の遺構の調査については、保存を前提に調査を行う必要があり、3号墓の墳丘構造上、埋葬施設の詳細な調査のためには盛土部分を完全に除去しなければならないため、遺構全体の保存を優先して埋葬施設の基数、構築方法、重複関係の把握に留めた。よって、棺の詳細な構造や副葬品等の埋葬施設に伴う遺物は確認していない。

周溝内等から出土した土器から、松尾頭3号墓の築造時期は弥生時代終末期前半と考えられ、終末期後半の方形周溝墓である松尾頭1号墓・2号墓よりも先行する時期に位置づけられる。

1. 墳丘の調査

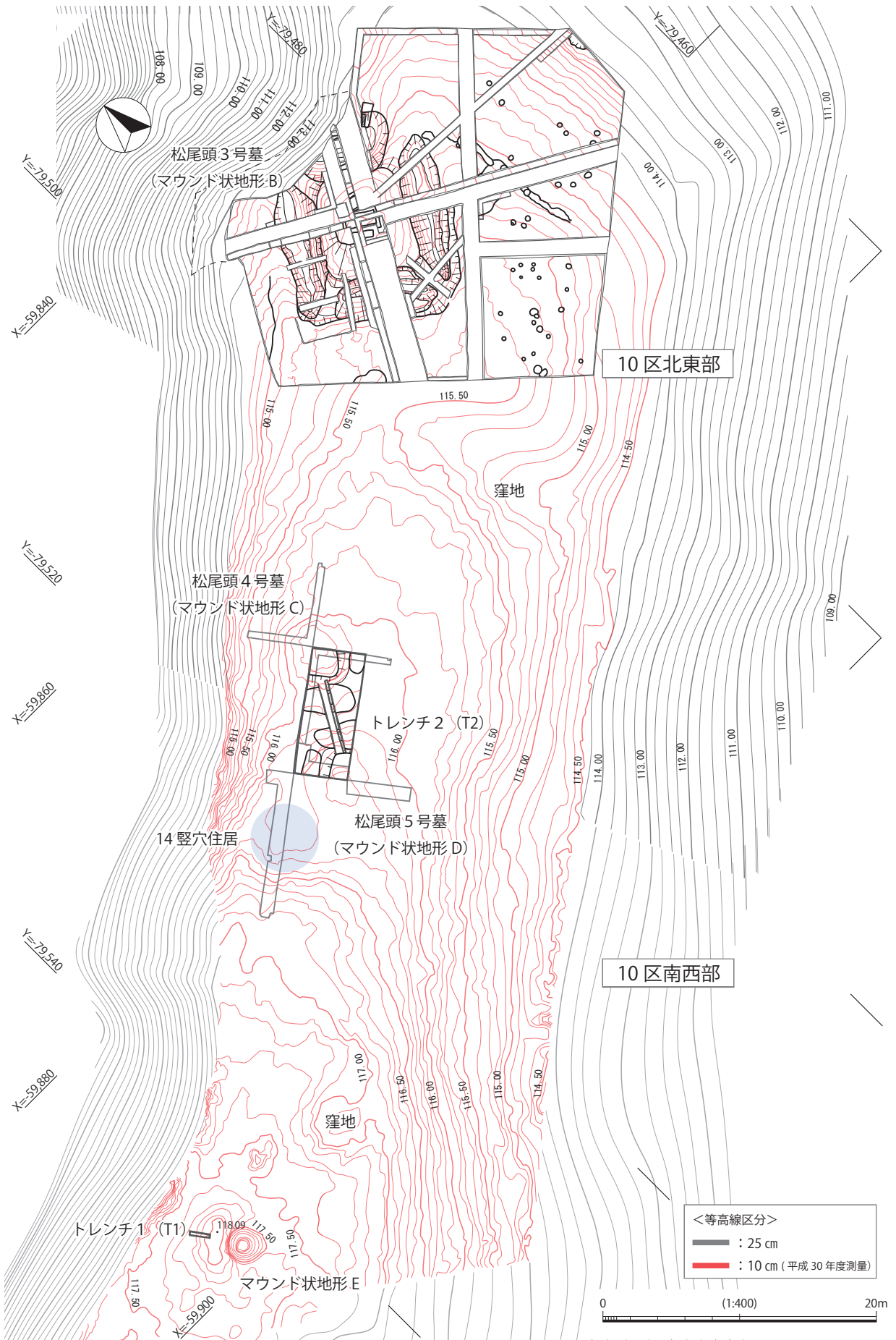
(1) トレンチの設定と遺構名（第24、25図）

第Ⅲ章第3節及び第5節で説明したとおり、第28次調査時に設定されたトレンチを基準に十字に幅1～2mの畔を設定し、Dライン（東西）、Eライン（南北）を軸として調査を進めた。十字軸の交点は、墳丘から丘陵緩斜面部との関係を把握するため、基本層序を記録したCラインのセクションポイント（S.P.C）と共有し、Cラインの軸はDラインと一致するように設定している（第20図）。そして、十字軸を基準に幅50cmの土層観察用トレンチを設定（東側トレンチ、西側トレンチ、北側トレンチ、南側トレンチ）し、墳丘から周溝外までの層序を記録した。このトレンチ名称に沿い、東側トレンチのかかる周溝を東側周溝、西側トレンチのかかる周溝を西側周溝、北側トレンチのかかる周溝を北側周溝、南側トレンチのかかる周溝を南側周溝と呼称し、周溝が途切れて墳丘内外が陸続きになる箇所を陸橋状遺構（以降、陸橋部）と呼称する。周溝の調査では、これらのトレンチ以外に、周溝内堆積や陸橋部との関係を確認するための畔を複数箇所を設定し、畔以外は完掘して周溝及び墳丘の形状、規模を確認している。

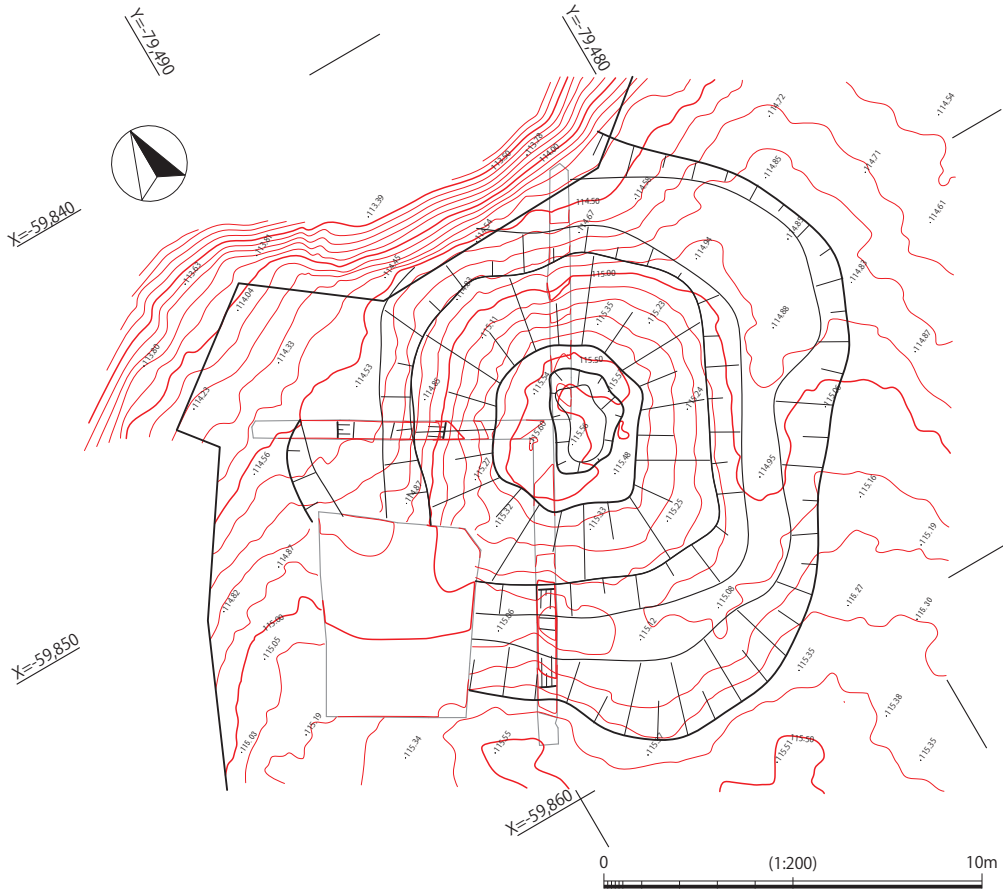
墳頂部の調査では、東西南北のサブトレンチによって埋葬施設らしき落ち込みを確認した段階で、埋葬施設の規模や形状、基数を平面的に確認するため、追加でトレンチを設定した。平面図記録後、土層観察のための十字畔の幅を30cm残し、墳頂部北西トレンチ、南東トレンチを設定した。墳頂部北西トレンチは表土除去後の検出作業では木根による攪乱の影響もあり新たな埋葬施設が確認できなかったため、調査面積を確保でき、中心埋葬の状況を確認できる墳頂部南東トレンチのみ掘り下げを行った。トレンチの掘削は、第3層から中心埋葬施設が掘り込まれていることを断面で確認できたため、概ね基盤層の高さで止めている。他の副次的な埋葬施設についても、平面プランを検出できた段階で掘削を止めており、棺底までの調査をしていない。

(2) 周溝（第24～26図）

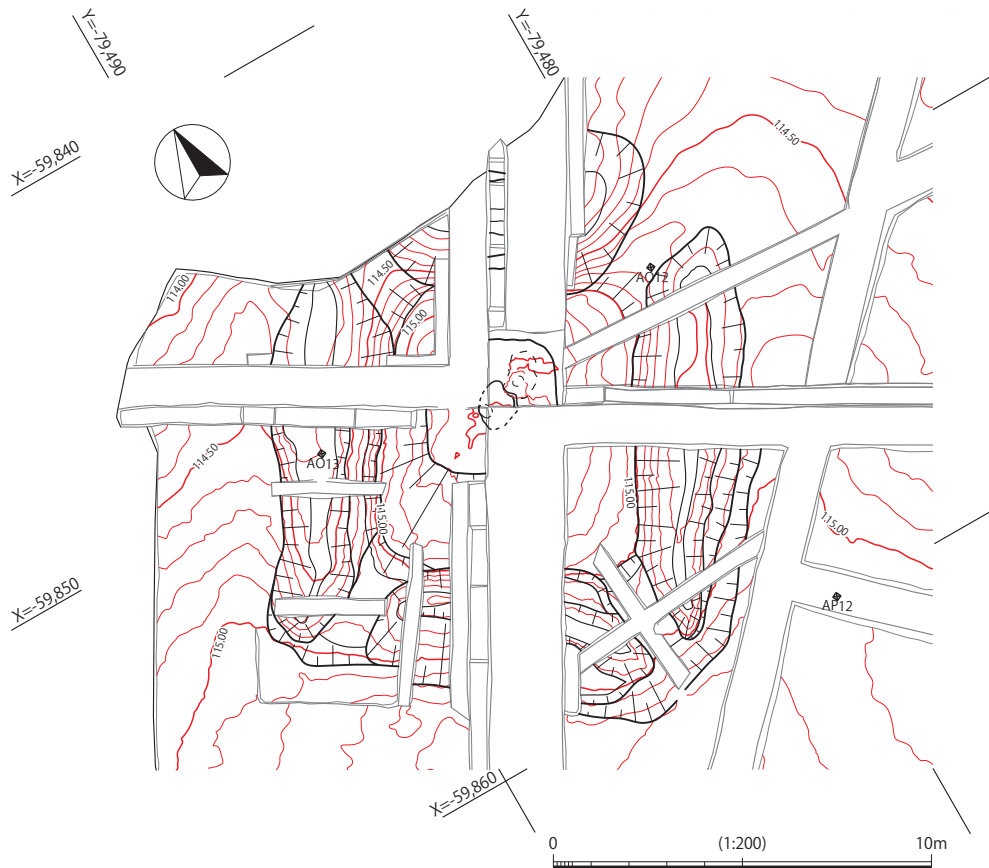
周溝の埋土は、表土層以下、土色及び含有物の違いから、上から順に埋土①（黒色土）、埋土②（灰



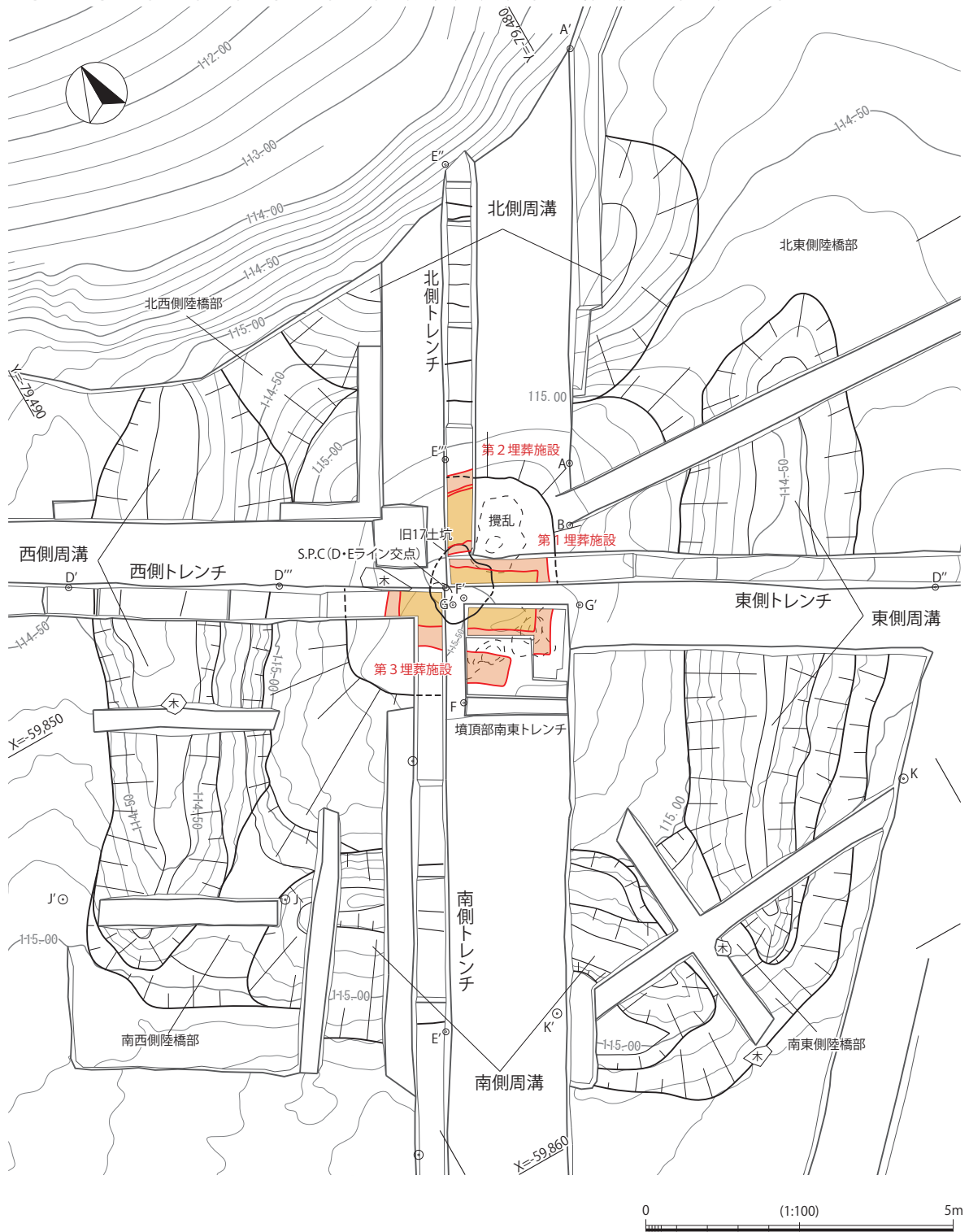
第21図 松尾頭10区調査後地形測量図



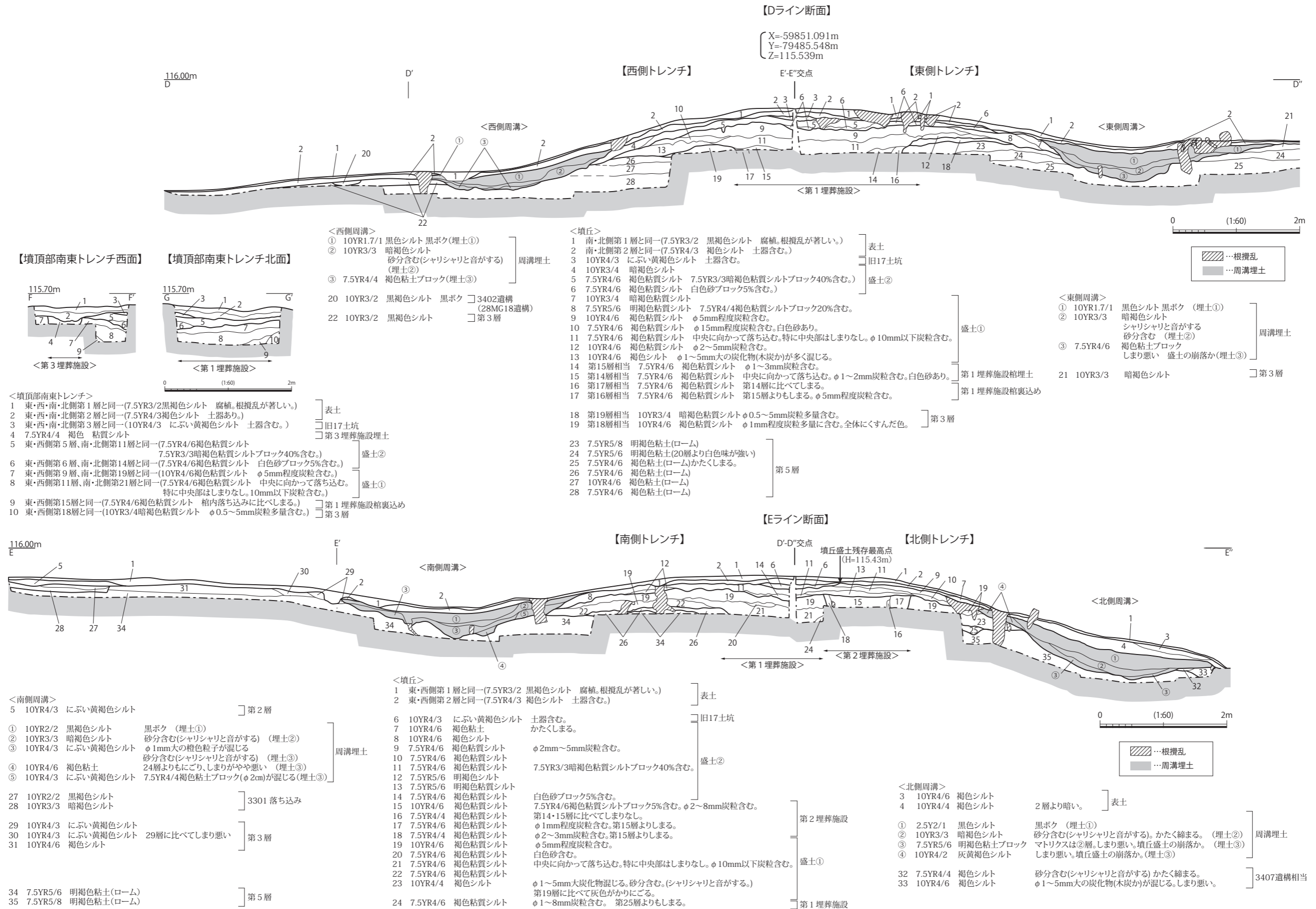
第22図 松尾頭3号墓墳丘現況測量図



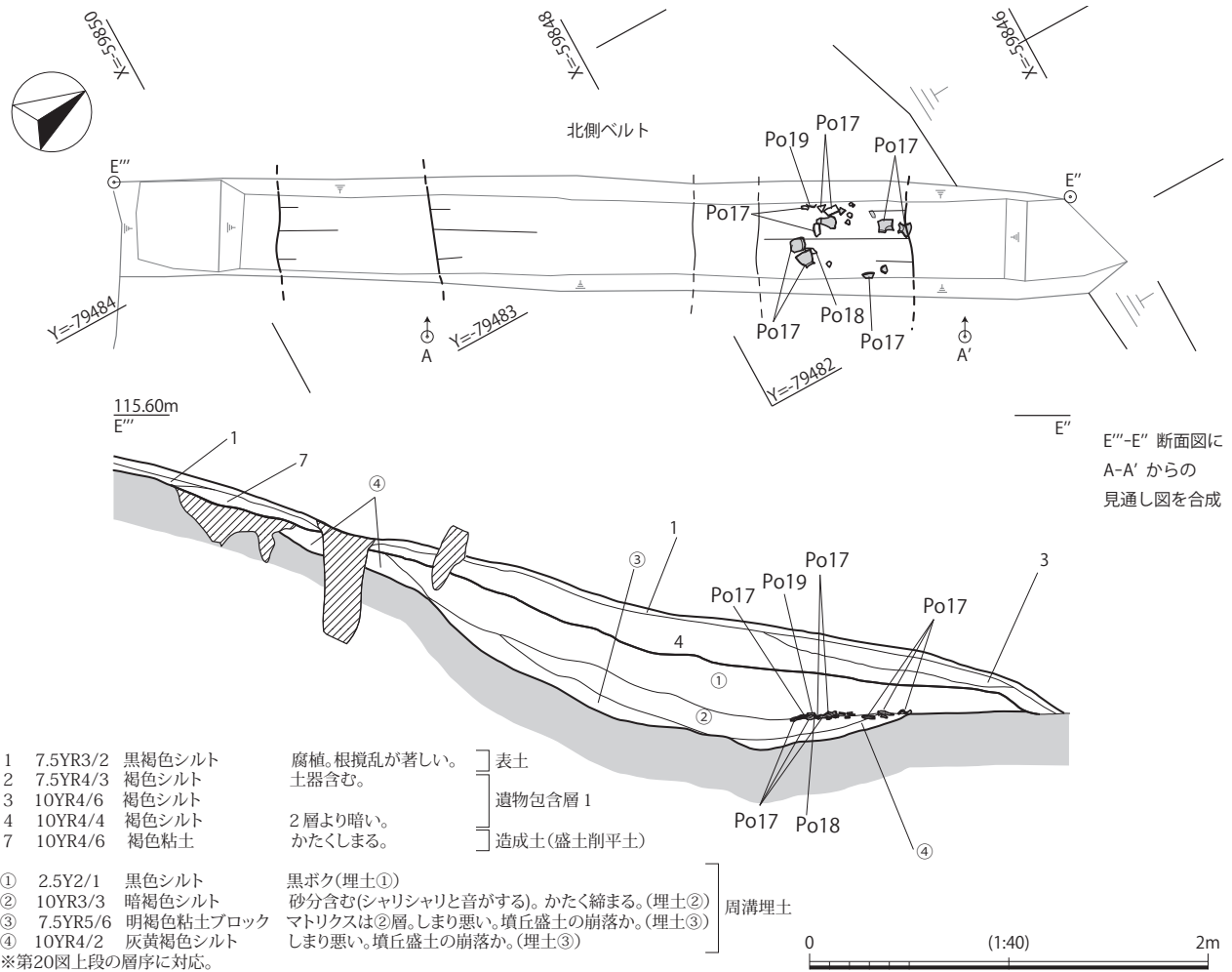
第23図 松尾頭3号墓墳頂部調査前測量図（周溝完掘後）



第24図 松尾頭3号墓調査平面図



第25図 松尾頭3号墓墳丘土層断面図



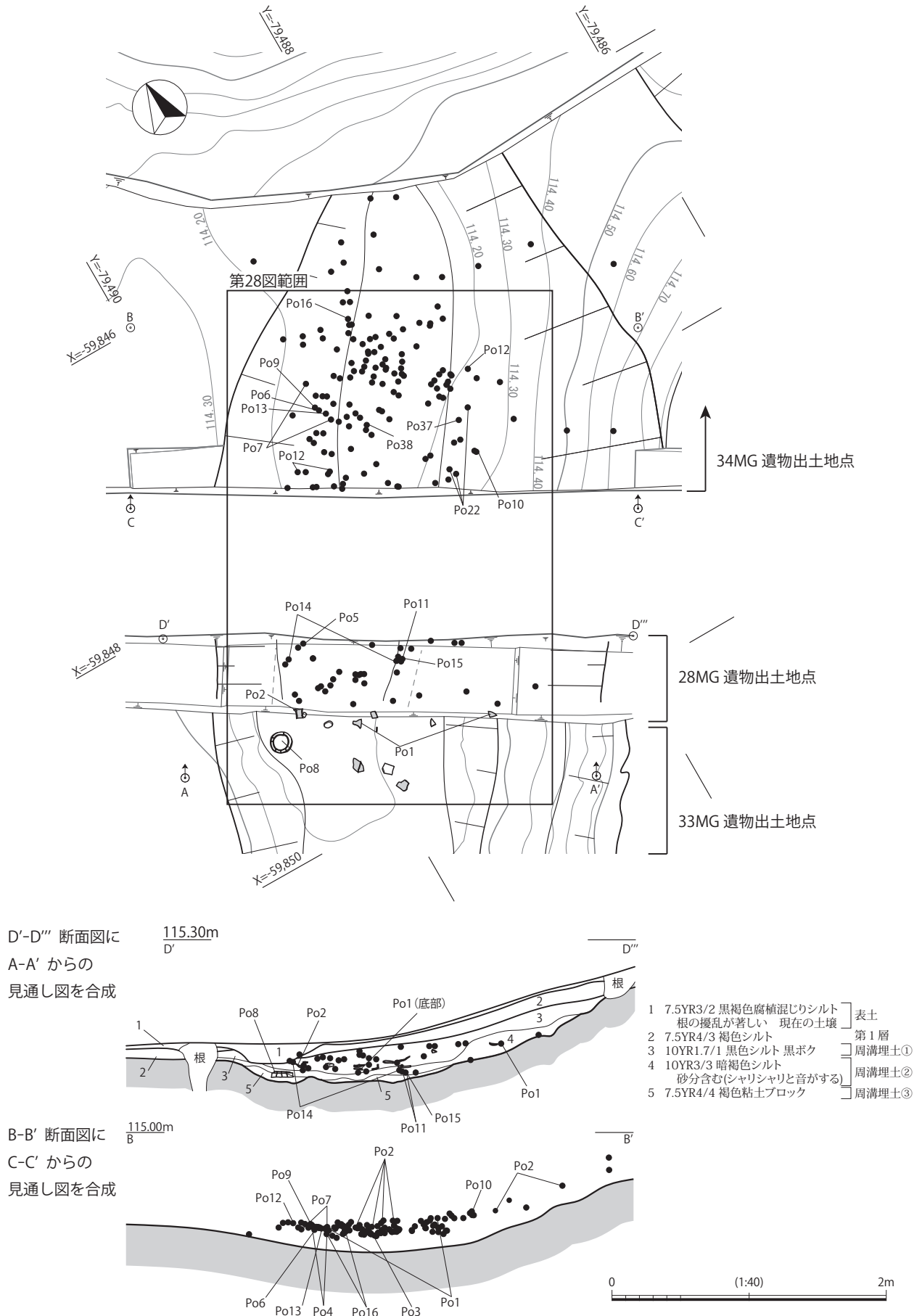
第26図 北側周溝遺物出土状況及び断面図

褐色土)、埋土③(埋土②にロームのブロックが混じる)の3層に大別される(第25図)。埋土②及び③は墳丘からの流入土と推定される。第33次調査では、Dラインから南の墳丘南半の周溝を調査し、土器、土製品、鉄器、礫が出土した。第34次調査ではDラインから北の墳丘北半を調査し、土器、礫が出土した。出土位置には偏りがあり、墳丘墓の築造時期に関わる遺物は西側周溝で最も多く出土し、壺、甕、高坏などの土器の破片を確認した。出土層位は埋土①の下面から埋土②に集中し、埋土③や周溝底面での出土はほとんど無い。

同じ墳丘墓群にあり、弥生時代終末期後半の松尾頭1号墓では、周溝内埋葬が確認されているが、松尾頭3号墓では周溝内埋葬を伴わないことが明らかとなった。

①北側周溝(第24、25、26図)

第28次調査でTr.8の7溝として検出した遺構である。第33次調査において北側トレンチの掘削を、第34次調査において周溝全体の検出及び周溝内埋土の掘削を行った。北側周溝の東半は第3層が広がり、周溝の埋土との判別が難しかったため、基本層序Aライン(北側サブトレンチ)の断面(第19図)を確認しながら掘削を進めた。結果、北側サブトレンチ断面に周溝の立ち上がりを確認でき、しまりのない黒色土の範囲を周溝埋土として検出した。西側は地滑りにより崩落しているため、周溝の長さは東西6.75m以上、幅は南北最大4.34m、墳丘墓外からの深さは0.2m、残存墳丘最高点(第25図Eライン上矢印、標高115.43m)から底面までの高低差は最大1.49mである。畔幅を広く設定



第27図 西側周溝遺物出土状況図及び立面図